

須藤南翠の「雛黄鷗」

和田 繁二郎

南翠は明治十五年ころより、「つづきもの」作者として知られるようになり、十九年「照日葵」「緑叢談」「新粧之佳人」を出すに及んで、一流の作家と仰がれるようになった。これらはいずれも政治小説ないしは、政治的色彩を持ったものであった。なかでも

「緑叢談」は、彼の改進黨的立場が明確に出ており、情熱と氣迫のあふれたものであった。翌二十年には、「癡人之夢」「臘夜桜」「金香露」「曠之旗風」「緑叢談統篇」等を發表している。これらは「金香露」をのぞいて、いずれも政治的色彩を持ったものであるが、十九年の諸作に比べて、政治的情熱に乏しく、また文学的な面にも緊密豊潤を欠くところが見られる。そうした反面、そこに織りこまれた恋と結婚といった人生的諸問題が中心に乗り出して来ている。これらの問題は、当時論議されていた男女同権、自由結婚など、青年たちの関心の的に触れたものであったが、いまこれから取上げようとする二十一年の「雛黄鷗」は、もっぱらこの問題を追究したもので、政治的要素を持たず、いわば南翠の作風の転向点に立つた作品と見られる。

なお「金香露」は、おなじく政治的要素を持つてはいない作品であるが、人情本的な男女の葛藤の中に、替玉結婚や、誘拐、傷害、

強盜、裁判等を織りこんだもので、その点探偵小説流行の先駆的作品とも見られるが、荒唐無稽なシチュエーションや偶然を積み重ねたストーリーなど、決して新しい作品とは見なし難いもので、取る程のものではない。

翌二十二年以後は、政治的なものも、主義主張の表出よりは風俗的なものに終るものが多く、その他は概ね、筋の展開に興味を持たせた戯作性の濃厚な作品となつてゐる。その点、この「雛黄鷗」には彼の作家歴の上で重要な意味を持つものと考えられる。

一

「雛黄鷗」は明治二十一年（一八八八）一月に刊行されている。その緒言で、南翠は、人情本について言及し、人情本が「表には貞といふ字の皮をつけ（中略）勸善懲惡を粧へども其の骨肉は人倫の大本さへ弁へず私通亡命淫慾の巷に筆を運ばして婦女子を誤り弱子弟を陥るるも計られざる卑褻の文の取るに足らぬ」ものであるとし、反面「情々之れを味ふ時は情致を細かに説出して恰かも人の心腹を内より写し示すが如く其の想像の感情を破るに鋭き才器には現今の自ら小説家に任ずる人も一步を譲り却つて教えを彼れに仰が

ん」と言つて、その人情の描出には見るべきものがあるとす。そしてさらに次のように言つている。

さて現今の世を見渡すに婦女子の地位も大いに進みて下等社会の者すらも稀には花と実を備へし愛たき女流のなきにもあらで此の人情を写さんには為永主義の眼を以て咄嗟に之れを綴るべからず然りとて時流の不消化なる文字を以て写す時は淑女の真価を貶すべし然れば氣骨を新にして進歩世界の精神を備へ彼の嫺雅なる皮相を仮りて写し出さば幾分か優美のものを下さんかと敢果なき事を憑みとなし「雛黃鸝」てふ筆すさみの巻を世に售ることとはなせり。

これによつてみると、為永流の見方ではいけないとし、またその表現を時流のものとするのもいけないとする。「時流のもの」が何を指すかは明らかではないが、おそらく「不消化」の言葉から見て、「書生氣質」的文体ないしは四迷・美妙などの言文一致体を指すものと思われる。「氣骨を新に」というのは前文から推せば、勸善懲惡を排すると取れるが、「為永主義の眼」を排すともとれる。いずれにしても新しい時代の精神を体してということであろう。また「嫺雅なる皮相」というのは前文に「貞という字の皮をつけ」とあるから勸懲ともとれるが、ここはそうではなく、文体を指すものようである。南翠の文は論理的にあいまいなところがしばしばあるが、ここもその類であろう。この場合は、新しい女性の生態を、人情本の文体によつて表現しようということだと解すべきだと思う。大体これによつて、作者の執筆の動機ないしは意図をうかがうことができよう。

る芳川馨と結婚する。姉が家を出ているので養子をとる身であるが、洋風にならつて別居を主張する。そして進んで財産分けの交渉をしたり、結婚式の日をきめたりして父母を驚かす。式は洋風で行う。馨が長崎へ一ヶ月ばかり出張するが、その間にお鳥羽は馨が遊蕩している噂を耳にする。彼女自身は出入りをはじめた外人とあやまちを犯す。これが馨の耳に入るが、お鳥羽の誓いと馨の度量によつてその場は納まる。

お花——お花は幼時からよく芝居に連れてゆかれ、また芸事をこまれる。そして着物や化粧のことに気を使い、虚栄心の強い女になる。彼女は海軍生徒山本保男と相思の仲になる。許されて結婚したのであるが、お花の家計の持方の悪いことや、教養がなく、芝居の話さえして居れば機嫌がよいという悪い面が目立つてきたので、とうとう保男に離縁されてしまう。

お香——お香は幼時から、ひどくひかえ目で内気すぎる子供である。お香は一時、保男と思いを交わすが、父の目が厳しくて遠ざかつてしまふ。いつか若さも失われ、二十六の時、お花と別れた保男の後妻になる。世間のこと、新しい事物については全く知らないで、保男の話相手にもならず、不満なほど、従順すぎる細君になる。

お梅——お梅は幼時から本と石盤を手離さず、女は大巨などのえらい人を生むものだから、よく学問をして立派な人間にならねばならないと信じている。長じて女子英学校に入ったが、父が事業に失敗してから、貧しくなり、さらに病氣になつた父を助けて家事に従ふ。また上杉家の小間使になつたりして家計を支える。父の健康が恢復してからは、上杉家を辭し、経済学の講義を聴きに行つたり、

「雛黃鸝」の結構は、まず「発端」で、互に知友となる幼女五人の性情を描き、将来を予言しながら、本文においては、それらの幼女が、長じて後、結婚するまでを、五人交互に関連づけながら描き出す形をとつている。したがつて、五人の娘をめぐる父母や相手となる青年たちが登場して、そこに作り出す場面やストーリーの展開はかなり複雑でめまぐるしい。それで、いまストーリーを各々の娘毎に切離して、その娘の形象をあわせて眺めることにしよう。

お金とお鳥羽——姓は上杉。幼時では、二人とも意地張りで剛情で、よく姉妹喧嘩をしたりするが、ものの合点が早く、新しいものを撰取る能力が見える。お金は長じて、横文字も読めるようになり、自由結婚を願うようになる。はじめ海軍生徒の山本保男にひかれるが、まもなく電信修技校の生徒花村柳之助と相思の仲になる。ところが二人とも長子で結婚ができない。柳之助は卒業後、東北へ赴任してゆくが、お金は後を追つてゆき、共稼ぎしながら小さな家を持つ。子供が生まれて間もなく、柳之助に女ができたことを知る。柳之助はまもなく東京に転動したが、お金は夫の言動を制して喧嘩の絶間がない。お金は離婚を思うが、一子英之助への愛にひかれてしんぼうする。柳之助は柳之助でお金の驕慢に堪えず父母の家へ戻る。お金は舅姑小姑の中で苦勞を重ねる。

お鳥羽——父上杉栄次郎は姉お金の野合にこりて、お鳥羽には立派な自由結婚（見合結婚）をさせようと思掛ける。彼女は女学校に通い男女同権を主義とするようになる。まもなく海軍省の技官であ

兄の馨に歴史を学んだりする。馨の仲介で海軍士官の山本魁夫と婚約し、楽しい交際期間を経て、結婚し、平穩な日々を送る。

これらの娘たちの生態の種々相を支配したものとして、それを育てた父母の条件がかなり重要なものとして語られている。

お金・お鳥羽の父、上杉栄次郎は某省の長官で、先妻の死後、芸者のお染を入れている。部下からは、次のような批判を受けている。御都合主義の欧化主義者である。

一 体長官は西洋の表面空氣に酔つてるから可笑い事があるヨ第一大の圧制家威望家で居ながら子女の教育は自由に限る結婚も自由が宜しい得に先進国の美風だと言つて能く英国辺りで行はれる自由教育及び結婚の慣例をも取調べずに独り合点即ち上杉的教養論で遣るものだから自由と放恣との区域が些とも立つて居なからうぢやないか。(二七五ページ)

お花の父親、花村慶造は「干渉好の圧制家」で、社長になつてからは奢侈をことし、「金の威光で剛情を張通す」ようになる。一方娘のお花には金にあかせて贅沢をさせる。また自分は、細君お蝶の絶対服従をよいことにして女遊びをやめない。一見それほどではないが古きを懐しむタイプで、自由や新しい婚約については次のような見解をもつている。

兎角此節は自由とか我儘とかいふ事が流行て驟をするにも自由にしろとか結婚も自由が宜いとか社中の若い手合は頼に自由信仰に居るが自由も権理も金を拵へて後の事サ自分の身が人の世話に成て居たり親がかりで居たりする者が自由も権理も入た者か子に自由の権があるなら親には猶ある筈だからニ親の目鏡で嫁を貰

つたつて構ふものか(一九八)

お香には母はない。父、唐沢了菴は、漢方医で、徹底した固陋ぶりを發揮する。とくに女子教育についてその言を見れば、次の通りである。

此節の娘は礼儀も作法も知らない癖に用もない本を読んで生意氣にばかり成り勝手で了得貝原益軒先生などは旨いものでござるのう生物識が出たがるのを遠くから誠めて近づけぬやうな教え方などは感心致します政府でも夫々お世話のある事だから何とかして女大学や女今川の様なものや再興し物やかに優美に仕立る事をなされば宜いのに此節はまた洋学を教えたり女に入らざる体操などを習はせるとは何いふ心得か愚老などには頓と合点が参りませぬ(五五)

お梅も母親がない。父、芳川竜樹は欧州へ行つたことがあり、歐風を正しく日本の実情にあわして生かして働く人である。子供に教育を与え、そして一人前になれば、子供の自由をまかせるといふ方針をとっている。筆者によつて次のように讚美されている人物である。

我が子二人の落付を計りて安き楽隠居の身とはなりても中々に自営の心は失せやらで分遣したる財産を資本に好む骨董の売ると買ふとに暇なく二人の子には(中略)露ばかりも恵みを受くる心なく我れ其の独りを養ひて更に傷しき事もなく世に処る道を一筋に踏み違へぬこそ世の中の親の亀鑑と言ふべけれ(三五七)

これらの両親のほかに、娘たちの相手をする青年たちが登場してくるが、ここでは比較的重要な役割を与えられていないようである。すでに名前も出てきたので簡略に言えば、山本魁夫と保男の兄弟は

これに関連して言えば、固陋な了菴に、女子の洋装洋装をけなすところで「承まはれば皇后宮様も唐人の服を召すさうですが御側に人はいない者か知りません」(二七)と言わせているが、これはやはり側近の軽薄な欧化政策を衝いたものと見られる。

次に教育論を見ると「幼稚時の庭訓ほど世に大切なものあらじ(中略)後に教へのありとても容易く矯正するものならねば親たるもの夢の間も心に恕せならぬぞかし」(二九)と言いつつ幼時教育を重要視している。またその間における叱る要領も述べている。それは了菴がお香に対する態度を批判するところで、「唯がみがみ小言ばかり言つて懐ける事も知らず四角四面に厳格で通さうとするから遂には那なに臆病な卑屈根性と化りて来るのだ」と言うところに見られる。

ところでこれらの教育の内容としての革新的な精神的近代化の中心問題である「自由」がどのように考えられているか。それは具体的に恋愛・結婚の場に出てくる。お金が親から結婚話を持ち出されて独語するところがある。

己は自由教育の熱心家だから結婚にも一切干渉しないと立派に言つて置きながら……夫りやア成程親に随ふのは子の道ではありませうけれど妾しは是はつかりは随はれませぬ(七五) 日本で女を卑しめるのは宗教の積弊で(中略)一つは此の自由といふ事を知らずに居ても女の子は親の言付に背いては成らぬもののだといふ事が腸へ染込んで居るから自分で身を卑しい者にしてしまつたのだから(中略)男だつて女だつて此の世の中へ生れたからは同等者で身体の構造が少し違ふからと言つて夫で人の位が違ふも

海軍の軍人、芳川馨は海軍の技官、花村柳之助は電信技手。柳之助はやや軽薄児で真に西欧的なものを理解していないのに、知つたかぶりをするというように描かれている。またもつとも上出来なのは魁夫で、男女関係にも新しくまた行過ぎない理想的なタイプに描かれており、それだけ作物めいた面がないではない。

これらの人物形象によつて、おおよそテーマをうかがうことができるが、その詳述は後章に廻し、これらのうち主役の五人の娘の評価を言えば、理想とされるのはお梅、まずまずというところはお鳥羽とお香、取えないのはお金とお花ということになる。父親の方ではお梅の父親芳川竜樹のほかにいづれも否定されるべきタイプとなつていく。

三

以上の人物の形象によつて、作者の主張し語らうとするテーマは凡そ理解されるのであるが、さらにそれらの人物の語るところによつて一層それを明確にすることができよう。

はじめに、恋愛・結婚の基盤をなす欧風撰取ないしは革新の一般的态度をみるならば、保男が説く正月の門飾り存廃論が目につく。ここでは、「外形の進歩は何時でも出来るものですから夫れよりは内部の進歩を計るのが目下の大問題だらうと思ひます最も総て外から内を誘わないものでは有りませぬけれども其の代り外の方へは人氣が走るのですから成るべく内へ内へと導いて夫れで丁度好い加減に外が進ませう」(一五)と言つていく。これは当時の皮相な欧化の傾向をいましめ、精神的な革新の要を説いたものである。こ

のではない男が女を撰べば女も男を撰ぶ事が出来るに極まつたものだから男と立派に立並る丈の学問をして(中略)上等の交際も出来るやうに成れば其の中には気の合つた朋友が出来るだらうから其の人を生涯の良人とするが宜い」(七四)

これは柳之助と、親の許さぬ結婚をして、結局には失敗をまねいたお金の言葉であるから、その肯定の度合は低いかもしれないが、やはり親の独断で結婚を取決める弊習を否定した発言と見てよいと思ふ。ただそれを理論としては理解し得ていても、「気の合つた朋友」の撰択をあやまれば失敗に終る例としたものとすべきであろう。この間の危惧を語つたのは山本魁夫が弟を思いながら感慨を洩らすところである。

若い女に自由の交際をさせるのを老人が見て野合奸通の媒介だとか乱倫の道具だとか悪くいふが是の説も無解に消無した者ではないモウ少しは男子も女子も知識が進歩して居て徳義に制されるだらうと思つたが情慾は未だ未だ理性には打勝て居るやうだ(一六六)

ここから一つの折衷論が導き出されてくる。すなわち馨の言葉に「幼少から結号をして置たり又は親同志が承知して娶せるとか然もない処が唯一回の相見で直と結婚させるから兎角に夫婦の間に不愉快な感覚があつたり風波が起つたりするので幾分か西洋の風俗を遷した方が宜しからう」(二五五)というのがあるが、これは見合結婚に続く交際の制度を肯定しているのである。ここに作者の結婚に至る一つの結論が示されていると見られる。

その他、本篇に語られている思想的ないしは批判的要素としては、

近代的な合理主義の主張、金満家、官吏等への批判、下層階級への同情などを見ることが出来る。合理的な思考の例をあげれば、お梅が父竜樹の病気を癒そうとして神前で水垢離をとつたあとで、竜樹からその無意味をただされるところがある。資産家・官吏・学者等への批判は、固陋の張本人了庵に語らせている。これは、否定した人物に語らせることによつて、作者の発言としての責をまぬがれようとしたものかとも思われる。たとえば「近頃出来星の金満家でござるが此奴一番付かないものでござる」と言い、「役人も依然野人の子、……(中略)御重役からして今では頓と有難味の薄い事で……(二三三)などあるのがそれである。

また貧しい者、目下の者をいたわる美德を、新思想との結合において示しているところがある。例えば、「望古家の花村慶造は何の用にか暑さをも厭はず車を駆せさせば其の主人より輓く車夫の苦熱を想ひ想らぬ身ぞ心得薄き挙動なる」(二二六)というところや、お梅が結婚後下男下女に親切にするのに対して、お鳥羽が人使いが荒いとしているところにも出ている。南翠の貧者への同情は、自由民権論者であるから当然のこととも言えるが、種々の作品にその発露を見ることが出来る。例えば「痴人の夢」のはじめの方に、貧民窟の写実的な描写があるが、そこでは極めて同情的な言葉を用いている。

四

以上のような、新しい男女結合のあり方を中心として、革新の理想を主張するところにテーマがあつたと見られるが、これらは必ずしも理論として直載しているのではない。緒言にも述べているよう

描かれず、安直に行爲の経過として書き流されてしまつていゝ。こゝういふ心理的動揺の中に人間そのものが如実に語られるはずなのである。この当時の作にこれを要求するのは無理なことかもしれないが、南翠はついにこの域に止り、これを超越することができなかったようである。

文章は、緒言に言つていゝように、比較的平易な文体を用いていゝ。「照日葵」などに見られる馬琴調とは大きな相違である。その点、彼としても一つの進歩を示したものと見られる。彼は二十三年の「行路難」において言文一致体を試みているが、それは試作的なものに止り、彼の文体として定着しなかつた模様であり、結局このあたりの文体が彼のものとなつたと見られる。

五

「雛黄鸝」一篇は、南翠が政治的啓蒙より転じて、一般的な人生的啓蒙、とくにこの場合は、男女の新しい結合について、自己の信念に従い、その指針を示そうとしたもので、その意図は一応果し得ていると思う。それは言うまでもなく啓蒙意識の露骨なものであるが、しかしこれを以て勸懲意識と同一なものとしてできるかどうか。たしかに彼の作品にはこの意識の明瞭なものがある。たとえば「金香露」の結末において、悪人どもがいずれも悲惨な末路を示すように設定し、それを叙した後すぐ続けて「何と子供衆合点か／＼」と結んでいる。この「金香露」は前述のように、もともと明治戯作をいささか探偵小説風に化粧した程度の作品で、この「雛黄鸝」とはおよそその風姿を異にするものである。「雛黄鸝」では、前述のよ

に、登場人物の心情の描出を試みている。もともと南翠は、小説に理論を持たむことをよしとはしていない。「緑萐談」続篇の凡例に「本書中往々論説を載する所あり著者は元米小説中に議論を挿むを好まず唯これ時好の然らしむると照応の欠くべからざる所あるに由るのみ」と言つているのによつて知られる。この「雛黄鸝」の中でも「小説の主眼は議論ではない感情である政治小説と雖も議論を感情に写し出すのが小説の小説たる所以」(二七八)と言つている。この方針は、比較的よく生かされ、前述の登場人物がそれぞれ具体的な行動のうちに、それを表わしている。

南翠の他の作には、しばしば荒唐無稽なシチュエーションが設定されて興をそがれるのであるが、この作品にはほとんどそれが無い。一見、ストーリーの展開に従つて、人物の登場にかなり偶然が見えるようであるが、もともと四つの家の者が、何らかの程度で知合つていゝので、左程無理な設定がされているとは言えない。強いて言へば、お梅が水垢離をしたり、それで失神し、上杉の妻に救われる場面とか、馨が家の貧しさのために屑屋になつて魁夫と会い、それから、その父同志が知合であつたことが知れるというあたりに、それがぞいでいゝ程度である。

人物個々の表現は、残念ながらやはりタイプ表現に止まつていゝ。その場その場の心情は描き得ていても、それぞれの性格を統一的に描き出すには至つていない。これはやはり、心情の追究、あるいは写実的な態度に欠けるところがあつたからとしなければなるまい。たとえば、お金が柳之助の後を追う時の心理、お鳥羽があやまちを犯す時の心理、そついつたものが内面的な矛盾葛藤煩悶としてうに人物の描写が、タイプに止るとは言へ、一応写実的な照明を受けており、人物の行動も比較的必然をもつて進退させていゝ。そこに風俗的と言へ、人生の実態が現実性をもつて浮かび上つてくる。勸懲小説の場合は、勸懲のために、登場人物はその結論へ引ずられてゆく土偶となる。そこに偶然性と荒唐無稽が登場してくるのである。ところがひるがえつてみれば、南翠はこの斜面に立つていたのであつて、必ずしもこれと無縁ではなかつた。

およそ、南翠の文学論は、ロマン的伝奇的な物語的变化に重きを置いていゝ。

小説の要は専ら立案にあるものなれば予は力めて意匠を新にし
作意を高尙にして之れを玄妙不思議の間に叙し尽さん(中略)要
するに予は有の儘の事を有りの儘より一步を進めて人情の發表せ
ざる神秘に写し出さんことに想像力を働かして」云々(緑萐談続
篇)

彼はこのように、伝奇的なロマンを予想し、よい意味で言へば、理想主義的な態度をとつていゝ。したがつて、彼の作品は写実によつて現実感を盛るよりも、未来像を描くか、時間空間を超えた世界を描くことが多くなる。この方法が、現実的な地盤にたつていゝならば、可能性探究の近代的な作品となり得るのであるが、現実的な地がためよりも、自己のイデオロギーや説教意識が先行している場合は、その可能性もおのずから現実遊離の傾きを避け得ず、近代小説の域に達することは困難になる。

その点、比較的卑近な身辺の諸問題に即して、自己の主張を述べた「雛黄鸝」は、その現実性を比較的保つていゝものと言わねばな

らない。もつとも、この場合、自己の主張が必ずしも真に近代的な理念に支えられているとは言いきれないであろう。それは前述の内面的な矛盾葛藤煩悶における人間そのものの追求の欠除をもたらした人間凝視の不十分さにも見ることができよう。それらの矛盾や煩悶の姿勢が、たとえ南翠自身の具体的な体験に立脚しないとしても、自己凝視の上に得られた近代的人間形成の苦悶に投影せしめたならばまた形象化し得ることも予想されるのである。所詮、当時の啓蒙家の常として、まだ現実との闘いの上に、勝目を持つていると信じられていた楽観的風貌には、自己凝視より自己否定へ通ずる道は遠いものがあり、したがってそこに真の近代的人間の誕生はのぞむべくもなかつたのである。

しかしながら、その楽観的な啓蒙的情熱のもつロマン性が、ようやく旧套の戯作的方法を脱して、現実的な人生への注目と、新旧思想調和の方向を見せた過渡的作品として、「雛黄鸝」一篇は、彼の作品としても、また当時の文壇においても優れたものとしなければならぬ。

当時、文壇の一方の雄として饗庭篁村があつた。彼もその楽観的な啓蒙的情熱にまかせて、この種の小説を書いているが、共に実利主義的ないしは折衷的な便宜主義に立つものであり、真の近代をのぞむべくもない。しかし、現実との接触を失つてゆく硯友社文学の抬頭期に、よく実人生との関わりを保つたものとして、黙視することではできない。

(三六・五・一〇)

堤中納言物語「このついで」の典拠について

土 岐 武 治

者の交渉関係について、茲に改めて私見を開陳することにする。いま「雨夜の品定め」と「このついで」との構想に於ける物語の基本的な箇所を指摘してみると次のやうになる。

その第一として、二者それぞれの冒頭の一文に、

○なが雨暗なき頃、内裏の御物忌さし続きて、いと長居侍ひ給ふを(源氏 帚木卷)

○はるのものとてながめさせ給ふひるかた云々(このついで)とある通り、帚木の巻の体験談も「このついで」の見聞談も、共に場面の時候は紅梅の香る春雨の頃となつてをり、物語る場所も同じく宮中なのである。

その第二として、源氏物語、雨夜の品定めに於ける三体験談のうち第一話は、右馬頭自身が語る指食ひの女・木枯の女との関係がそれであり、第二話は、頭中将自ら語る常夏の女との実話談であり、また第三話は、式部丞自身が語る藤くひの女との関係といふやうに、経験談の体裁はそれら三種の小話から構成されてゐるのである。このやうな配列の趣向に対し「このついで」の第一話は、或る貴公子と身分のある女との間に出来た稚子を中にしての情話を語る中将の見聞談であつて、第二話は、中納言が昨年秋に、清水寺で世を厭

わが国の古典物語中には、三つの事件・三種の人物・三階級の身分とか、或は一作品の構設を三つの素材から取扱ふとか、とにかく、結構上三様から組立てられるものが頗る多い。例へば、物語の祖といはれる竹取物語は、竹取翁譚・妻争ひ説話・羽衣伝説とからであるし、源氏物語帚木の巻の雨夜の品定めは、三つの体験談からなり、また落窪物語の継子いぢめの説話も、第一・第二・第三といふ三部から成立つてゐるのである。これらは、その一考証に過ぎぬが、堤中納言物語十篇中の「このついで」も、次に解説する通り、第一話・第二話・第三話といふ三つの見聞談から成り立つ短篇物語である。後段に詳述する通り、これら三様の小話配置の構設は、源氏物語、帚木の巻の冒頭に見える「雨夜の品定め」の三体験談の趣向を模したものである。この点については、国語と国文学、昭和十五年七月号所載、「このついで」と題する倉野憲司博士の論文や小著「堤中納言物語新解」中の当該篇の品評欄にも一応指摘してゐるのであるが、その後更に両者の関係を種々検討すれば、従来の実証の内容に未だ不十分と思はれる諸点もないわけではないので、以下両